

令和5年度 会派調査研究報告書

(視察先1箇所につき1枚)

会 派 名	上志の風
事 業 名	女性職員の活躍推進について
事 業 区 分	研究研修

1 上田市での課題と研修・調査の目的

福井県鯖江市は、SDGs17の目標のうち5『ジェンダー平等の実現』に注力し、女性のエンパワーメントが地域のエンパワーメントにつながると考え、女性が活躍しやすいまちづくり事業に取り組んでいる。行政の管理職に占める女性の割合に関して、上田市では今年度13.0%(16人/123人)であり、令和7年度までに14.3%以上とする目標を掲げている。一方、鯖江市は40.5%と、上田市や令和4年度の全国市区平均(17.3%)と比べても、群を抜く高い割合となっている。

また、女性の就業率は県内1位(59.1%)であり、福井県では全国2位。共働き率も、県内1位(61.2%)で、福井県は全国1位。

『ジェンダー平等の実現』を軸に、経済、社会、環境がより良くなる相乗効果・好循環を生んでいる取り組みを学ぶことは、上田市の女性職員が自分らしく輝きながら活躍できる環境整備を進めるために有益であり必要なことだと考える、

2 実施概要

実施日時	視察先	福井県鯖江市
令和5年8月9日(水) 10時00分～11時30分	担当部局	さばえSDGs推進センター/ 総務部ダイバーシティ推進・相談課
<p>■鯖江市について</p> <p>県中央部に位置し、北は福井市に隣接。地場産業を多く持ち、眼鏡フレームはチタン合金や形状記憶合金などの新素材開発を進め、国内シェアは9割以上。漆器では樹脂素材の導入を進め、業務用では国内シェア8割以上。羽二重を始めとする繊維業も出荷額が多い。市民主役、学生連携、オープンデータ、女性活躍の「鯖江モデル」で全国から注目される。</p> <p>□日本のジェンダーと世界のジェンダー</p> <p>ジェンダー格差を測る「ジェンダーギャップ指数」(経済、政治、教育、健康4つの分野のデータから作成されている)は、146か国中、日本は125位。これは2006年の公表開始以来、最低の順位となった。特に、経済(123位)と政治(138位)のギャップが世界中でも大きい。経済分野の主な課題は、「女性の労働参加率」、「同一労働の賃金格差」、「収入の格差」、「管理職の女性割合」である。</p>		

□SDGs 目標の中で、「5 ジェンダー平等の実現」を軸にした理由

→①古くから女性も経営を担う地場産業が息づいているから

鯖江の地場産業は昔から下請け分業体制のため家族経営が多く、女性は経営を担う一員であった。女性たちは、自らの裁量で仕事を回し、仕事にやりがいを感じ、楽しさ喜びを実感して、家族と共に分かち合い、助け合いながら仕事と生活の両立をしてきた。これが、鯖江の生活文化であり、鯖江を支えてきた企業風土でもある。

→②「ジェンダー平等の実現」をすることで、その他 SDGs16 の目標達成にも繋がるから

- ・女性の教育が進むと、技術改革が進み、経済成長にも繋がる(目標 4. 8. 9)
- ・女性の教育・社会進出の機会が増えたら今までになかった環境問題への対策が新たに生み出される(目標 6. 7. 12. 13. 14. 15)
- ・女性の貧困が減少し、(発展途上国などで)同等に医療を受けられるようになる(目標 1. 2. 3)
- ・社会における性別の格差がなくなり、人類全体がもっと連携できるようになるまちづくりも進む(目標 10. 11. 16. 17)



□鯖江ならではのシンボルマーク「さばえグローバルめがね」



鯖江版 SDGs の取組みのシンボルとして、コンセプトメガネ「グローバル」を作成。

SDGs17 の目標を左右に分けて、目標 5 「ジェンダー平等の実現」のカラーであるオレンジを繋ぎ役として真ん中のブリッジに。「ジェンダー平等こそが輝く未来への鍵！」を合言葉に、「男性の理解と意識改革の推進」・「女性の参画意欲の向上」を取り組みの 2 本柱にしている。

□”市民主役のまち”の土壌が出来るきっかけになった世界体操競技選手権大会(1995 年)世界規模の大会を初めて開催するにあたり、小規模の市のキャパシティで、来た人たちに満足していただけるか不安があったそう。しかし、市民が心を合わせおもてなしをし、無事に大会

を終えることができた。「やればできる！」という経験が、市民の自信になった。

□市民主役のまちづくり

2010年、市民提案で「鯖江市民主役条例」を制定。自分たちのまちは自分たちがつくることを明文化した。翌年「提案型市民主役事業化制度」開始。2011年度は17事業、2023年度は36事業を実施。その制度において、女性活躍の鍵となるプロジェクト「鯖江市役所JK課」の運用が2014年にスタートした。JKのイメージを鯖江から変えよう！と行政に一番遠い存在の女子高生が、楽しくまちづくりに関わったことで、「女性活躍のまち」「市民主役のまち」として地域のロールモデルになった。中には、まちづくりが楽しくてUターンしてきた参加者もいて、2019年にはJK課の卒業生からなるJKOG課も結成された。これまでのべ参加者は131人。短期的ゴールを事前に設定せず、創発的な「新しい何か」を作り出す。活動の輪は全国の自治体へも波及し、他市町村でもJK課事業が実施されている。

□女性の参画意欲の向上を！「インポスター症候群ゼロ運動」の実施

インポスター症候群とは、自分の能力を必要以上に過小評価し、本当はできる能力がありながら最初からチャレンジを諦めてしまう傾向のことで、自己肯定感が大きく関わっているとされている。鯖江市では、女性活躍を阻む要因の一つとなっている「インポスター症候群」の解消に向けて、市民アンケートや自己肯定感を高めるセミナーなどを行っている。

□新米パパ・ママ向け ワークライフバランス教室の実施

新米パパ・ママはライフスタイルが変化するタイミング。共家事の重要性や男性の育児休暇など、仕事と子育ての両立に関する研修を実施している。



[感想]

「ジェンダー平等とは」という話の中で、担当の関本光浩所長が、ジェンダー平等は、女性だけではなく、社会皆のためのものであり、「こうあるべき」という絶対的なものではなく「選択の自由」だとおっしゃっていたが、私もその通りだと思う。実際、様々な分野において、ジェンダーギャップがあるのは事実だが、男女がそれぞれ長所や個性を活かしあいながら、そのギャップを埋めていける取り組みが、これから不可欠だと感じる。

今回の視察に際し、初めて「インポスター症候群」を知ったが、地域全体で『やれば出来る』という風土や、頑張っている人を周りがサポートし合える環境の重要性を改めて感じた。

また、今年で事業化10年目を迎えた「鯖江市役所 JK 課」の取り組みにおいて、良い広がりを見せている大きな要因は、当の本人たちが「楽しみながら活躍している」からだと感じた。居場所と出番が街にあることを学生時代に体感できることは、将来この場所で活躍したいと思えるきっかけになるだけでなく、“女性も当たり前のように活躍することができる”という価値観に繋がってくると思う。

[市政に活かせること]

・まず、「ジェンダー平等」に関して、正しい理解の推進をしていくことが大切だと感じた。鯖江市の取り組みを通して、男女それぞれにとって良いことだと行政、市民、民間に広く伝えていきたい。

・行政に一番遠い存在の女子高生が楽しみながらまちづくりをしている姿は、地域を元気にするだけでなく、彼女たち自身の自信や活力にも繋がっている。上田市の高校では、現在学校単位での取り組みが中心となっているが、学校という枠を超えて、活躍できるという「意識を育てていく」場所を創ることも重要だと感じる。「鯖江市役所 JK 課」のような若者参加型の事業の展開を提案したい。